

高齢者が楽しさを体験するための Therapeutic Recreation 援助理論モデル研究

— Leisure Ability Model に基づいた援助理論モデルの構築と実践的応用

マーレー寛子 (社会福祉法人小羊会)

キーワード： 楽しさの体験 Leisure Ability Model フロー 自己決定理論

### 1. 研究目的

高齢期の生活を支えるための高齢者福祉サービスの中で提供されているレクリエーション活動は、本来、人々が今までの人生の中で楽しんできた余暇生活を継続するための援助の一つであり、また、高齢期の新たな生活を豊かにするサービスである。しかし現実の高齢者福祉現場のレクリエーション活動が、高齢者にとって本当に生きがいとなる楽しい経験になっているのだろうか。

福祉援助者は、高齢者が楽しさを体験するという意味を問い「楽しむことができる」ということが人間の生活や健康にとって重要なことであり、福祉の究極の目的である幸せにつながっていくということ、根拠を持って主張できなければならない。質の高いレクリエーション援助というものが、単にそれを提供する援助者の資質に拠るのではなく、理論的根拠のある援助モデルに沿った方法を提案することにより、適切な援助を普遍化することが可能になると考える。

本研究の目的は、高齢者が楽しさを体験することの理論的枠組みを構築することにある。そのために Csikszentmihalyi のフロー研究から始め、Deci と Ryan らの自己決定理論を検討してきた結果、Leisure Ability Model (以下 LAM) に行き着いた。LAM は、Therapeutic Recreation (以下 TR) 分野の中で最もよく知られているモデルであるが、モデルとしての理論的根拠が弱いと指摘されてきた。今回は以下の 3 点の研究報告を行う。まず、LAM が持つ理論的な問題点を解決していくことを目指して、主としてフロー理論と自己決定理論と LAM との関係を検証し、次に LAM を基礎とした援助の新たな理論モデルを提案する。そして最後にそのモデルの高齢者福祉施設における実践的応用を試みる。

### 2. 研究の視点および方法

本研究の目的である理論に基づいた援助モデルを構築するために①LAM をその基礎的枠組みとし、フロー理論と自己決定理論を LAM の理論的基盤とし、これらの理論を高齢者の楽しさの体験とどのように関連づけることができるかを文献から考察した。②それらの検討をもとに LAM を土台とした新たな視点の援助理論モデルを提案し、③そのモデルが実践現場でどのように応用することができるかを実際のデイサービスセンターでのレクリエーション活動の事例をもとに検証した。

### 3. 結果

①Leisure Ability Model に関する文献を検討し、その作業から LAM が TR 分野の中で果たしてきた役割とモデルが持つ問題点が明らかになった。特に、モデルとしての理論的基盤が弱いことが指摘され、それゆえに実践的なサービスへの応用や研究につながりにくいことなどが明確になった。LAM は、Peterson と Gunn によって 1984 年に TR のテキストの中で Therapeutic Recreation Service Model として発表された。1998 年に Stumbo と Peterson が、TR Journal に論文として LAM を掲載し、そこではじめて LAM が基礎としている理論について触れ、その中でフロー理論と自己決定理論も取り上げた。しかし他の研究者らからは、それらの理論はその説明が羅列されているに過ぎず、それらの理論と TR 援助との関係について明確に述べられていないと指摘をされている。最新のテキスト (2010) の中において、用いられている各理論がどのように TR の中で応用されているかについ

ての説明が加えられているものの、それぞれの理論は個々に論じられているだけであり、それらがどのように他の理論とかかわりあっているかの説明はない。それゆえに本研究において理論的基盤を強化することの意義が見出された。

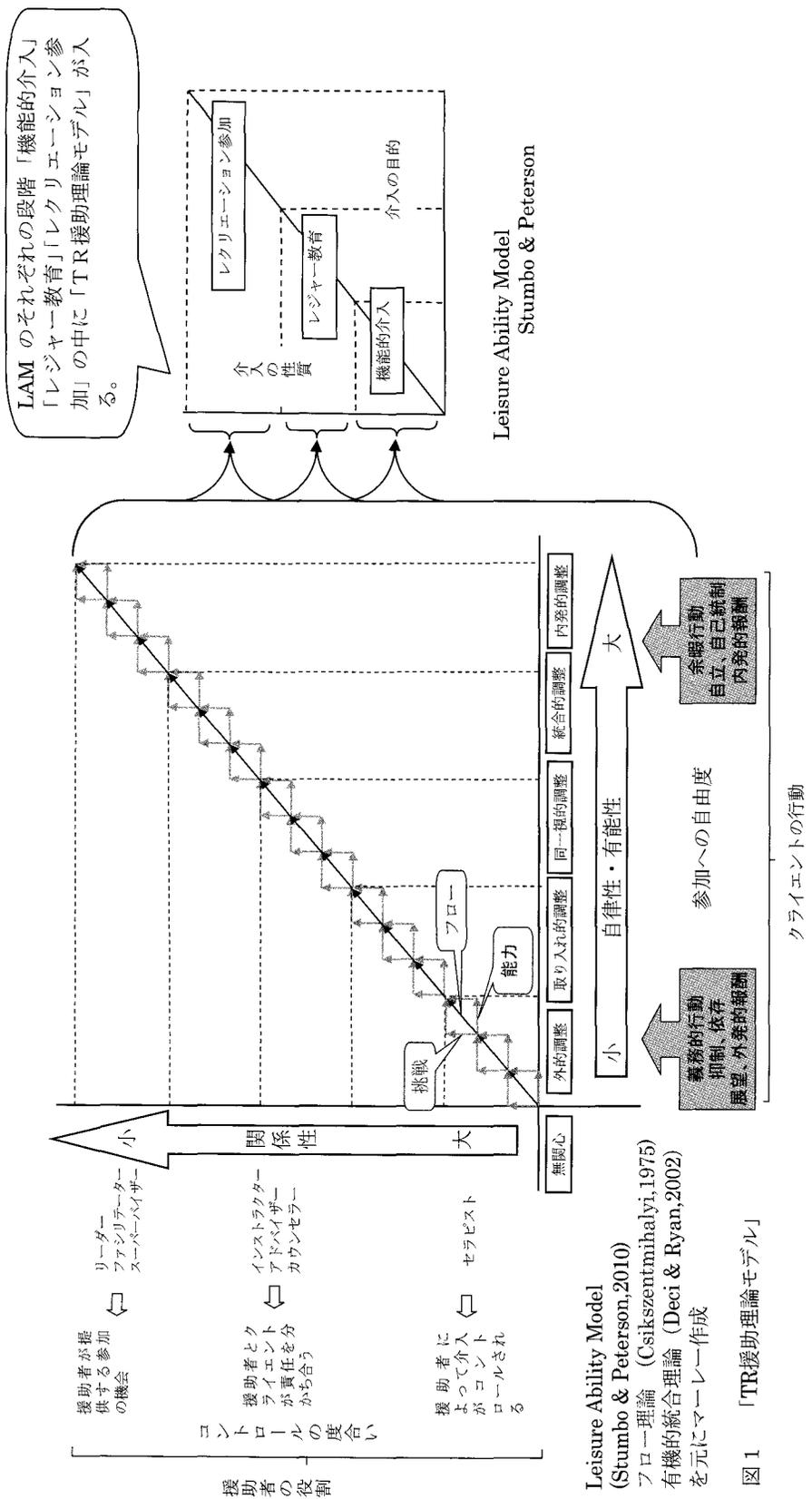
先ず、Csikszentmihalyi の研究によって明らかにされてきたフロー理論について検討した。フロー現象を「楽しさ」ととらえ、その楽しさを生み出す心理学的構造を理解することによって、福祉サービスを利用している高齢者のレクリエーション援助に応用することができないかを検討した。Csikszentmihalyi に関する文献研究を行い、人は自分の行為を統制し、自分自身の運命を支配しているという感覚を経験する時、気分が高揚し深い楽しさの感覚が生じることが示されている。すなわち、自分の心を統制することによって生活の質を決定することができるのである。このような理解に立つことによって、これまで提供されてきた高齢者へのレクリエーション援助の問題点を明らかにすることができた。

Deic と Ryan らの自己決定理論の初期の研究では、外発的動機づけによって内発的動機づけが低下するという見解が示されていた。しかし彼らは、近年 3 つのサブ理論を提唱し、「認知的評価理論」、「基本的欲求理論」、「有機的統合理論」として自己決定理論をさらに展開した。「有機的統合理論」では、外発的動機づけの考え方を見直した。自律性の高い動機づけを示す「同一化的調整」については、外発的動機づけであっても正の影響を示すと考えられている (Ryan & Deci, 2002)。

Fortier と Kowal(2007)らは、自己決定理論とフロー理論との関係について検証している。彼らは、自律性、有能さ、関係性の認知と最適経験の関係を検証し、その結果、自律性、有能さ、関係性の認知は、フローと正の関係があることがわかった。また、彼らの研究の結果 (Kowal & Fortier, 1999, 2000)、フローが動機づけの結果として概念化することができ、フロー経験が自律的動機づけを高めることができることを明らかにしている。活動に参加するための人の初期動機がいかなるものであっても、フローを経験することによって、人は自律的に活動を選択することにつながるのである (Fortier & Kowal, 2007)。すなわち、外発的に動機づけられ、仕方がないからやってみたという人であっても、その時の経験がフローにつながり、楽しさを経験することによってその活動を自律的に選択するようになると考えることができる。

Stumbo と Peterson らは、LAM の論文を出した時点では、Deci と Ryan らの自己決定理論の有機的統合理論で示されている外発的動機づけの連続体の考え方を検討していない。従来レクリエーションへの動機づけが内発的動機づけを基本としていただけに、この外発的動機づけを 4 つの自己調整の段階に分類するという考え方は、これまでのレクリエーション援助の基本を大きく変えるものであり、同時に実践現場の援助者にとって大きく納得できる考え方であるといえる。

②フロー理論と自己決定理論について検討し、理解を深めることによって、これまでの LAM では、説明そして応用仕切れていなかったそれぞれの理論が持つ高齢者のための TR 援助への可能性が明らかになった。そして LAM の中にフロー理論と自己決定理論の 3 つのサブ理論を組み込むことによって 2 つの理論相互の関係が明確になり、具体的な援助のための理論として応用することができるのではないかと考える。図 1 で示すモデル図は、LAM における「機能的介入」「レジャー教育」「レクリエーション参加」の各段階の中にフローモデルと自己決定理論の 3 つのサブ理論を組み込んだ LAM 再考のモデルである。これを「TR 援助理論モデル」とする。このモデルによって LAM が示していた援助者の役割の段階図に含まれる問題点が見えてきた。この新たな「TR 援助理論モデル」によってこの問題の解明を図ることができる。また、各サービス段階におけるクライアントの個別のニーズに対しても適切な分析が行えると考える。クライアントの動機づけは、どの段階にあっても変化してい



るものであり、援助者のかかわり方は、それに即して変化していくべきである。その変化に合わせた援助の仕方を「TR 援助理論モデル」は説明している。単に外発的 v.s 内発的動機づけではなく、外発的動機づけの中でも段階があり、それに合わせた援助を検討することがレクリエーション援助の中でも求められてくる。

③「TR 援助理論モデル」を用いてレクリエーション援助の理論的裏づけとして応用することができないかをデイサービスセンターでの事例を用い検証した。TR 援助理論モデルの利用可能性、有効性を検証するために、2つの作業を行った。TR 援助理論モデルは、事業所と個人のクライアントの2つのレベルでの利用が考えられる。この検証作業では、Peterson と Gunn が示した「TR 包括的プログラム計画」の「分析」→「概念化」→「検討」→「決定」のプロセスに沿ってデイサービスセンター事業の検証を行い、その検証によって事業所の活動全体がどのように「TR 援助理論モデル」に即して計画されているかを明らかにした。包括的プログラム計画のプロセスの中で TR 援助理論モデルを意識することによって、事業所にとってのレクリエーション援助の目的や役割がより明確になった。

その上で個別クライアントの事例に焦点を当て、援助記録、援助者からの聞き取り、クライアントのインタビューをもとに「援助プロセス評価表」を作成し、クライアントレベルでの「TR 援助理論モデル」の有効性を明らかにした。この作業によってこれまで LAM だけでは説明がつかなかったクライアントのニーズが浮かび上がってきた。LAM が示す機能的介入、レジャー教育、レクリエーション参加の各段階において、援助者の働きかけやクライアントの主観的な認知によって動機づけのレベルは変化し、フローの経験の要素も変化してくることが確認された。さらに TR 援助理論モデルの視点から、各クライアントの個別目標に対する意図的なかかわりを検討することができた。また、「TR 援助理論モデル」の今後の課題についても明確になった。

#### 4. 倫理的配慮

この事例研究を行うにあたって、クライアント本人に研究の目的と守秘義務に関する説明を行い、研究における利用の承諾を得た。インタビューをするクライアントは、認知機能が自立と判定され、本人の承諾が得られている任意のクライアントを対象とした。

尚、この要旨で使われた引用・参考文献は紙面の都合上、当日の配布資料内に掲載する。